

幼 兒 の 心 理 的 發 達 (七)

東京家政大學教授

山 下 俊 郎

五、五歲兒の心理的發達

幼兒も五歲すぎるとめだつてしつかりして來る。幼稚園や保育所で最年長組になつた幼兒を見ると、よくもこうまで成長してくれたとは、保育者の誰もが感ずることではないだらうか。ひと通りのことは出来るようになってゐる、自信を持つたしつかりした態度を持つてゐる、たよりになる、たのもしい感じがする。このような感じを外國の學者は、五歲兒が *dependable, skilful, sure of self* であると言ふのである。そこで五歲兒の心理的發達の状態をいままでと同じように、四つの方面から考へて見ることにしよう。

(1) 運動的發達

運動の發達の中でまず全身的な運動の發達の状態から觀察して見よう。五歲兒は全身的なからだのこなしにおいてすでに一とおりのことが出来るようになってゐる。

幼兒たちの日常生活を見てもスキップももう上手に出来る、ジャンゲル・ジムによじ登つて、あちこちと移りまわることも自由自在といつてもいゝくらいに動きまわつてゐる。机くらの高さからはどん／＼とび降りてゐる、ブランコをこぐことも出来るようになってゐる、片脚で立つて身體の平均をとることも可なり巧く出来るようになって來た、というように全身的な運動のこなしは相當にうまくなつて來てゐるのである。このことは四歲兒のところでも述べた平均臺渡りにもよく現われてゐる。四歲兒のところでもかかけた平均臺渡りでの得點表を見ると、五歲兒の平均點は四・八點になつてゐて、ほとんど滿點の五點に近い。すなわち、兩脚を一度もふみちがえないでかわりばんこにふみ出して、上手に全身のバランスをとりながら渡つて行くことが出来るというものが、大部分の五歲兒なのである。このようにして全身的な運動のこなしは五歲兒においては、幼兒としてはほとんど一とおりの完成の域に近いといつていゝであらう。

手先きのこまかな巧みさにおいても五歳児はすでに一とお
り熟しているといつていい。指さきでこまかなものを扱うこ
とがすでに可なり上手になつて來ている。例えば、食事のと
きにはしを使うことが可なりうまくなつて來ている。はしを
使うことは、前に三歳児のところでは述べたように、三歳から
はじめられるのであるが、これはたゞ使いはじめるというだ
けである。三歳、四歳ではまだ上手には使えないのである。
ところが五歳すぎると上手に使えるようになる。わたくしが
前に實驗的にしらべた所によると、三歳児や四歳児ではいく
ら正しいはしの持ち方を教えて訓練して見ても、すぐにもと
へもどつてしまつて中々ちやんと使えるようにならない。し
かし五歳児になると訓練さへすれば大人なみの正しい持ち方
をして上手にはしが使えるようになるのが見られる。これは
手先きの巧みさが訓練さへすれば進んで來るといふところま
で熟して來たのである。繪を描かせてもかく線がかなりしつ
かりして來るようになる。いわゆる線でかく繪は五歳ごろに
なつてようやくしつかりして來るといえるのである。このよ
うなことからして、五歳児になると三角形をかけたお手本を
見せてかゝせると、きちんと三角形がかけるようになるので
ある。このように、手先きの巧みさが進んで來ることは、こ
のほかのいろ／＼の日常生活にも現われて來るので、帽子を
かぶること、ストッキングをはくこと、背中のボタンを除い
ては眼のとゞく所にあるボタンは一とおりに掛けられるよう
なること、髪をとかすことが出来るようになること、といつ

たようなことを見る事が出来るのである。

このように運動の發達を一とおりに眺めわたして見ると、五
歳児は運動において一とおりの巧みさを身につけるようにな
つたといえるであらう。いままで述べた所では、この巧みさ
は全身運動も手先きの細かな運動も、言い方としては同じよ
うに巧みになつたと言つて來たのであるが、このことを、こ
ゝで少し吟味して見たいと思う。子供における運動の力の發
達においては一つの原則がある。それは全身運動のように大
筋肉をつかう運動と手先きのこまかな運動のように小筋肉を
つかう運動との、この二種類の運動の發達の順序に關してで
ある。大筋肉をつかう運動はいつでも小筋肉をつかう運動よ
りもさきに發達する。大筋肉をつかう運動の基礎が出來てか
ら小筋肉をつかう運動が發達するのである。指先きのこまか
な運動がほんとに完成されるのは、肩、腕などの筋肉をうま
くつかうことが出来るようになってからで、年齢でいうと一
〇歳以後である。小學校の低學年でも細かい字を書いたりす
ることは適切ではないのである。したがつて幼児の時期にお
いては、運動の發達から見ても、まず大筋肉をつかう運動を充
分にさせることによつて、その發達をうながし大きくなつて
からさらに細かな運動がうまくなるように基礎を作らなければ
ならない。幼児期に大筋肉の運動を充分にしなかつた子供
は、大きくなつてからいろ／＼の運動に何となくぎこちなさ
が感じられる。幼児期に病弱であつて充分の運動の出來なかつた
ような子供によく見られることである。このようなこと

は、小さい手先きの運動の訓練をまつたく無視していゝといふことではない。小さい運動もやはり發達してはいるのであるから、年齢相應の線までは發達させることを考えなければならぬこともちろんである。たゞどちらに重點を置かかといふことであり、幼児期をはずすと大切な土臺が出来ないからその土臺の方にまず重點を置かなければならないといふことを注意したいのである。

(2) 知的發達

五歳兒は知的發達においても四歳兒にくらべて一段と進んで來ている。いわゆる知的なはたらきは小學校の年齢になると、めだつて進んで行くので、こゝに小學校における知的な面のいわゆる製作が意味を持つようになるのであるが、そのスタートは幼児時代の最後の時期に、このような知的なはたらきがめざましく活動しはじめる所にあるといつてよいのである。

四歳兒の知的發達について述べるとき、四歳兒がいわゆる質問期のまつたゞ中にいて、質問期の頂點に立つてゐることを述べたのであるが、そのときふれたように質問といふものは幼児たちの心が自分のまわりの世界に對して廣く眼をひらいて來たことを意味する。この傾向は五歳兒になると一そう強くなつて來るのである。質問も相變らず盛である。そしてたゞ質問するだけでなくいろいろなものをいじりたり、いろ／＼のことをやつて見たがる。小學校の子供たちはよくマッチのレ

ッテルや郵便切手やいろ／＼のものを集めるのであるが、この蒐集といふことは、幼児期の五歳ごろからそろ／＼はじまるのが普通である。もちろん大きい子供のうちに系統だつた集めかたでなく、手當り次第のガラクタ集めが多いのはあるが、自分のまわりの世界に對してひらけて來た心の動きのおもむく所がこのような傾向となつて現われて來るのである。このような事相に見られるように、幼兒たちの心が外の世界に向つて開けるので、いわゆる求知心とでもいふべきものが非常に強くなつて來るといふのが五歳兒の知的發達に見られる一つの大きな特徴となつて來るのである。

このような知的な心の動きの結果として五歳兒はいろ／＼の自分の身のまわりのことに對する知識を持つてゐるようになる。五歳兒は、「あなたの右の手には指が何本あるの?」「左の手には何本?」「兩方の手をあわせたら何本指があるの?」と聞かれると正しい答を即座にすることが出来る。片手に五本、兩手で十本の指があるといふことは、數えればもちろんわかる。すでに四歳のうちに十三まで數えるようになってゐるからである。しかし、即座に指の數が答えられるといふのは、たゞ數えられるといふのとは意味がちがう。この即座に答えるといふのは、このような數える能力を自分の身のまわりのいろ／＼なものに適用して見て、この適用するといふ経路を何度もくり返してゐるうちに指の數を覺えてしまつたことを意味する。すなわち自分の持つてゐる力をつの道具として自分の身のまわりの世界にあてはめて用いて

見るという所まで知的發達が熟して來たのである。同じよう
なわけで、五歳児は通貨の名前を一とおり知つてゐる。一
圓・五圓、十圓、百圓というような紙幣を見るとこれが五
圓、これが百圓というようにいうことが出来る。これは通貨
のほんとの價值を知つてゐるということではないが、いわば
通貨の顔と名前を覚えてゐるのである。これも日常の生活の
中で始終見聞きしてゐるという経験を重ねた結果が、覚えら
れる所まで熟して來たのであると考えられるのである。

また、五歳児は、六歳近くになると右と左の區別をおぼえ
る。一體、右左という空間的な關係は、向きによつて變つて
來るので中々覚えられないのであるが、五歳児が右左を覚え
るようになるというのは一つの大きな發達である。これもい
まゝで述べたことと同じようにして、幼児が経験を重ねて來
た結果であるが、こゝでもちよつと注意して置きたいのは、向
い合つた人の右左が逆になるという相對的關係は、自己中心
に物を考へるといふ幼兒的な心の特性からして中々理解され
難いものである。このような自己中心に考へるといふことの
もつとはつきりした現われは、このように知的なはたらきが
進んで來てゐるのに、五歳児ではまだ想く／＼像と現實との區
別が十分につき兼ねることがあるという所に見られる。想像
と現實とが區別できないというのは、自分の心の中だけで考
へたことと實際にあつたこととがごつちやになつてしまふこ
とであるが、幼兒のうその中に想像的なうそといわれるもの
があることはその一つの現われとして注意しなければならな

いことである。例えば幼児が自分の頭の中で高いお山に登つ
たといふような想像をめぐらしてゐると、それがほんとにあ
つたことのように幼児自身が感じてしまつて、「きのう、僕
はね、高いお山にのぼつたんだよ」と言ふような結果になつ
て來るのである。實際にあつたことでないことを實際にあつ
たように言うのであるから、まぎれもないことであることに
は違ひないのであるが、幼児自身はこの場合うそをついてい
るといふ意識を全然持つてゐないのである。幼兒のうそとい
われるものによつたような想像的なうそがあることは、幼兒を
相手にするものがよく／＼心の中にとめて置かなければなら
ないことであらう。

このように一方では五歳児は幼児らしいあどけなさの中に
片脚を残してゐるのであるが、もう一方では片脚を一步すゝ
んだ知的發達の線にそつてふみ出してゐる。四歳児の所で言
葉の發達についてその發達がいちじるしいことを述べたので
あるが、語いにおいても、發音においても、文章の形におい
ても、五歳児は話し言葉としては一とおりの完成の域に近づ
いてゐる。したがつておとなの話が自由自在にできるように
なつてゐるのである。また、時間的な觀念においても、きの
う、きよう、あすといふような日の區別はすでに明確に出來
るようになつてゐる。また五歳児は繪をかくときに、大體は
じめから何をかくといふ意圖と計畫とをはつきり持つてい
る。四歳までの子供ではじめからの意圖がはつきりしてい
ないで、途中から何をかくといふことが定つたりまた變つた

りするものも相當にあつたのであるが、五歳児になると大多数の子供ははじめから何をかくかという意圖と計畫とがはつきりしているのが普通である。このことで分るように五歳児は、すでに一つのことを始める前におよそ一定の計畫を持つてゐるようになってゐるのである。

五歳児に知的なはたらきがすすんで来たということは、その考えるはたらきすなわち思考の發達にこれを見ることが出来る。その第一は物の定義が出来るようになったことである。四歳以下の幼児だと、例えば「鉛筆つてどんなもの？」と聞かれると、説明出来ない、定義が出来ないのである。たまたま眼の届く所に鉛筆があると「あれ」といつて指すぐらいのことしか出来ない。所が、五歳児になると「字をかくもの」というように言葉で定義することが

出来るようになる。これはこのような思考の力が出て来たことを示すものである。しかし一面においてこのように、用途によつて物の定義をするというのは、最も幼ない定義の段階であつて、自分とそのものとの關係において考えるという自己中心的な考え方の現われである點において幼児的な傾向であることに注意したい。五歳児の思考の力の發達を今度は他の面から考えて見よう。一體、幼児はいまの定義のように言語的な、抽象的

な思考においては貧しいのが普通である。しかし、具體的實物について、自分の行動で解決するという思考においては相當のことが出来る。碁石を上の方の圖のようにならべて見せて、この右の方へつゞけてならば御覽なきやいという問題を出して見ると、五歳児は、上段の場合には黒白、黒白、……、下段の場合には黒白黒、黒白黒、……という反復の關係をはつきりつかんで、この關係にしたがつて右の方へならべて行くことが出来る。このような關係の判斷が出来るようになってゐることがこゝに示されてゐるのである。

知的發達において五歳児はいままで述べたように、一段と發達して、知的時代としての學童期へつゞいて行こうとしている。この知的なはたらきのすすみをなだらかにしてやるように考えることは幼児のまわりにいる者のつとめである。

